

## 経済学教育における授業時間外学習促進の試み

社会科教育講座・松野尾 裕

### 1. 授業の概要

**授業科目：**経済学Ⅱ（前学期・金曜日・1限）

**授業題目：**経済教育の諸課題。キーワード：経済教育、人間発展と経済発展、生活の質。

**教職資格にかかわる事項：**中一種免（社会）「社会学、経済学」・高一種免（公民）「社会学、経済学（国際経済を含む。）」の選択科目。

**授業の目的：**21世紀社会にふさわしい新しい経済生活の在り方を追究するなかで、小・中・高等学校における経済教育の今日的課題を発見し、経済教育設計を構想する基礎的力を身に付ける。

**授業の到達目標：**(1)経済教育の課題を多角的に捉えることのできる知識を身に付けている。(2)経済教育の課題を具体的に提示する短いエッセーを書くことが出来る。(3)経済教育に関する著書・論文に関心を持っている。

**ディプロマ・ポリシー：**教育に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している（知識・理解）。自己の学習課題を明確にし、理論と実践を結び付けた主体的な学習ができる（関心・意欲）。

**授業概要：**まず、今、経済教育で何が問題なのかを問うことから始める。そこには身の回りの小さな生活から地球規模の事柄まで出てくるだろう。また、小さい子どもからお年寄りにいたるまで人の生涯に関わる問題が出てくるだろう。それらを確認しながら、「人間の発達」に繋がる経済教育の内容を、授業参加者全員で考える。成果を急がず、ゆっくりと作業を進める。

授業はコロキウム形式（対話・討論式授業）で行う。したがって、授業のスケジュールは受講者の関心と学習のための準備の状況に応じて決められる。

第1回 はじめに—授業の趣旨説明

第2回 現実（である）と展望（であるべき）

第3回 課題の設定—「人間の発達」という視座

第4回 生活から経済を考える（1）働くこと

第5回 生活から経済を考える（2）暮らすこと

第6回 文献による学習成果の発表と討論（1）

第7回 同上（2）

第8回 同上（3）

第9回 同上（4）

第10回 同上（5）

第11回 同上（6）

第12回 同上（7）

第13回 エッセーを書く（1）

第14回 エッセーを書く（2）

第15回 むすび

**授業の方法：**受講者による文献内容の発表と、教員の主導による討論・考察、関係文献の紹介等を繰り返し、最後に受講者各自でエッセーを書き、授業内で発表した後、提出する。

主文献として阿部彩『子どもの貧困Ⅱ』（2014年）、関係文献として橋木俊詔『格差社会』（2006年）、阿部彩『子どもの貧困』（2008年）、宮本太郎『生活保障』（2009年）、神野直彦『「分かち合い」の経済学』（2010年）、白波瀬佐和子『生き方の不平等』（2010年）、赤石千衣子『ひとり親家庭』（2014年）（以上岩波新書）、および政府統計等。

**授業時間外の課題：**授業中に指示された文献等を利用して、理解の不十分な箇所を調べる等の復習を行うと共に、次回授業時における発言のための予習を行う。

**成績評価：**授業中の発表・討論内容と期末のエッセー（提出されたもの）の内容に基づく。評価の基準は、まず文献の内容を理解し適切な発表ができているか、及び授業内の討論を理解し参加しているか(50点)、次いで授業の内容を各自の考察へと発展させているか(50点)、である(計100点)。

**受講者数：**21人

教育学専修3回生 1人

教育心理学専修3回生 2人

社会科教育専修3回生 8人

人間社会デザインコース3回生 10人

**授業の進捗状況及び期末レポート：**授業はほぼ当初のスケジュール通りに進行した。期末のエッセー執筆では、草稿をもとにして授業中に発表し、他の人の発表も聞いたうえで、完成することとした。提出期限を授業最終日から2週間後とし、授業の内容を十分に振り返ったうえで、各自の問題関心に即して論点を絞りA4用紙2枚程度にまとめるよう指示した。

### 2. 授業評価アンケート

授業者が独自に作成した「授業評価アンケート」を用いた。

## 質問

あなたの授業時間外学習の実情についておたずねします。

A. あなたはこの科目にかんして

1. 発表が課されていない時、授業時間外の学習時間は毎週何時間くらいでしたか。

2. 発表が課されている時、

(1) 課題の量は適当でしたか。

(2) 発表の準備をするために何時間くらいかかりましたか。

(3) 発表後、発表の内容にかんする事後学習の時間をとりましたか。

B. その他

3. 規程では各科目（実習科目を除く）について授業時間と同じ時間の授業時間外学習をすることになっています。現状の時間割にもとづく履修であなたはこれを実行することが可能ですか。

4. 3で「不可能」と答えた人におたずねします。不可能の理由は何ですか。簡単に書いて下さい。

## 3. アンケート結果

受講者21人のうち21人全員が回答した。

A.

1. およそ0時間	2人
およそ0.5時間	9人
およそ1時間	6人
およそ2時間	3人
およそ3時間	1人

2.

(1) 少なすぎる	2人
適当	19人
多すぎる	0人

(2) およそ1時間	1人
およそ2時間	7人
およそ3時間	7人

(2～3時間1人を含む)

およそ4時間	3人
--------	----

(3～4時間1人を含む)

およそ5時間	1人
--------	----

およそ10時間	2人
---------	----

(3) およそ0時間	5人
およそ0.5時間	5人
およそ1時間	10人
およそ2時間	1人

B.

3. 可能	1人
-------	----

工夫すれば可能 18人

不可能 2人

4. ○サークル活動等、他の活動時間が必要。

(「不可能」と回答した他の1件は記述なし)

## 4. 授業時間外学習にかんする考察

### アンケートの結果について

今回のアンケートは「授業時間外学習の実情」にしぼって質問を設定した。上記の「授業概要」および「授業の方法」で述べた通り、本授業は、文献講読・発表・討論を軸にして展開されるものであったから、発表者に当たっていない者も毎週0.5～1時間程度の予復習を行っていた。発表に当たっての準備時間は2～3時間が多く、最も多い者は10時間を要していた。発表の課題の分量については大部分の者が「適当」と答えているので、授業時間外学習の課題の量としては2～3時間の作業で授業に臨める程度のものが適当だといえる。

発表した後の発表の内容に関する振り返りの時間が0.5～1時間程度で、0時間と答えた者も5人おり、復習時間がやや少ないことが気になる。受講者に予習をしておかないと授業で発言できないという気持ちが先行してしまったのかもしれない。授業は「ゆっくりと進める」という方針をとったつもりであったが、復習の大切さを伝えきれていなかったようである。

現状の時間割にもとづく履修で授業時間外学習の時間を確保することについて、多くの者は「工夫すれば可能」と回答しているのは、やや意外であったが、履修が過密な状況のなかでも授業時間外学習の時間は工夫次第で確保できると学生自身が考えているのは頼もしいことである。

### 授業時間外学習の促進について

学生に対しすべての履修科目について一律に授業時間外学習を求めることは、かえって学生の学習意欲をそぐことにもなりかねない。多くの履修科目のうちには、力を入れて学ぼうとする科目と、そうでない科目があるというのは自然なことであり、むしろそうしたなかで、自らの学習関心の方向を発見していくのであろう。

教室には熱心に予習復習をして授業に臨んでいる者と、そうでない者が混在していることを前提として、授業者は授業を進めなければならない。アクティブ・ラーニングの積極的な開発が求められている今日、たとえ予習復習を十分にしていない者でも気後れせずに授業に参加できる、また熱心な受講者もそうした者を受け入れられるような授業展開をする力量が授業者には求められるのだと考える。